

「福島」の課題と私たち

日本基督教団仙台市民教会主任担任教師
仙台キリスト教連合被災支援ネットワーク事務局長
東北学院大学・仙台白百合女子大学非常勤講師
川上直哉

はじめに

臨床宗教師、という新しい言葉がある。「チャプレン」と呼ばれてきた宗教者の働きを日本に根付かせようとする試みである。既に「教誨師（刑務所チャプレン）」「宗教主任（学校チャプレン）」といった言葉が使われて久しい。被災地にも、チャプレンが必要である。全ての痛む魂への配慮を行う人の役割を示す言葉を、カタカナ言葉ではなく、漢字を使って意味が通る言葉で。そうした願いを込めて、今、「臨床宗教師」という言葉が、被災地で使われ始めている。

筆者は魂の配慮を行うもの（牧会者）として、今、被曝地（特に福島）に関わっている。二度の原発爆発事故により、広範囲の被曝地が生まれた。「被爆」ではない。「被曝」である。原因不明とされる巨大な不安と健康障害の現場。それが「被曝地」である。無数の魂が痛んでいる。今こそ、臨床宗教師としての役割が、例えば牧師たちに、求められている。

「原発の課題」について書こうと思い、まず考える。私たちは、この巨大な課題を前に準備が足りていない。手持ちの言葉が不足している。だから今、最初の課題として、私たちは語り合い、言葉を創り出し磨き上げなければならない。願わくば、この小文が、その一歩となればと願う。

放射能禍について

「原発の課題」と言った時、まず、私たちは「放射能禍」を見つめなければならない。被曝地には、放射能の災禍が溢れている。その災禍を見つめると、放射能とは何かが、見えてくる。

筆者は現在、公益財団法人ウェスレー・ファウンデーション等の支援を受けて、福島県いわき市に住む子育て中の母親たち累計 30 名ほどに、ほぼ毎月定期的にお会いし、「短期保養」のための交通費支援を行っている。おひとりずつ 30 分程度の面談をさせて頂く。その中で、子どもたちの健康不安が募っていることを知らされる。鼻血が止まらない、アレルギー症状が激化した、口内炎が無数にできている、そして、甲状腺の異常が確認された、といった具合である。

NPO 法人「福島県の児童養護施設の子どもの健康を考える会」所属の看護師が、いつも、電話でこうした不安に対応して下さる。医療的に診れば、甲状腺異常以外のほとんどは、放射線による直接被害ではないだろう、と結論付けられる。それで、母親たちは少し、安心する。しかし、私は考える。今日の前にいる母親たちに憑り付くこの巨大な不安こそ、放射能の災禍ではないか。

そこで考える。「放射能」とは何か。それは“何か”を「放射」する「能力」である。何を、放射するのか。現場に立って理解することは、「放射能」とは「放射線」と「不安」を放射する能力である、ということである。被曝地は、この意味での「放射能」に直接曝される地域である。この災禍こそ、「放射能

禍」である。

不安と分断と麻痺

放射能は、不安と放射線を放射する。不安と放射線は、その性質において、対照的である。

不安は、一挙に広範囲に拡散して被害をもたらす。そして程なく、その被害だけを残して消え去り、忘れられてしまう。対して、放射線は、一か所に照射し続けて被害をもたらす。その被害は、忘れたころに顕在化する。

放射線の害につて、筆者は詳しくない（それは今、専門家によって確認中であるという！）。しかし不安の害については、胸を痛めながら知らされている。家族が引き裂かれる。共同体が雲散霧消させられてゆく。生計を立てるべき生業が破壊される。そして、個々人の魂が深く毀損されて行く。

筆者は、月に六回程度、行政や自治会の現場責任者とお会いする「傾聴訪問」を行っている。そこで知らされるのは、「分断」と「麻痺」の現実である。不安は広範囲に広がる。不安とは、原因不明の恐怖である。原因が不明である以上、様々な対応がなされてしまう。そしてその対応それぞれは、自らの正当性を合理的に説明できない。結果、分断が生ずる。両親の間でも、子どもの将来を必死に考える者（多くは母親）と、今日明日の生計を立てることに専心する者（多くは父親）との間に、対話が困難な程の分断が生ずる。その分断の中で、母親・父親それぞれの魂が痛む。そして子どもの魂が、痛む。

魂を肉体と霊との総合と考えるなら、分断から所謂「健康被害」が生ずることも、不自然ではない。その際、感覚を麻痺させることで、応急対応を行うとしても、それもまた、不自然ではない。

郡山駅や福島駅に、ガイガーカウンターを持って行ってはいけない。危険を知らせる警報音を鳴り響かせて、迷惑だから——こんな冗談のような現実が、今、日常化している。それは、不安に脅かされ分断に痛んだ結果の麻痺、である。

原発の課題と私たち

「東電」「廃炉」「再稼動」「特定秘密」「原発労働者」「周縁化」「差別」等、原発の課題は、無数に広がり、私たちは当惑する。しかし、その広がり根元には、扇の要のような一点がある。それは、被曝地の放射能禍である。これを見れば混乱しない。これを見なければ、混乱する。課題が、あまりにも巨大だから。だから、原発の課題とはつまり、被曝地を見ることだと思う。

最後に「私たち」をキリスト者としてみる。キリスト者は、愛の福音を語る。愛は不安を取り除く。愛は和解をもたらして分断を覆う。そして愛は痛む者と共にいる神の告発の声を内に響かせて麻痺したものを正気に戻す。だから、「私たち」が臨床宗教師として被曝地に立つことの意味は、大きいと思う。

（この文章は、12月25日付『キリスト新聞』に掲載されました。）